

山口県方言考

山 中 鉄 三

テレビ，ラジオ，新聞，雑誌などのマスコミの発達と地域文化圏の異状な開発は急速に方言の崩壊を進め，やがては文化財としての方言はその存在を没してしまうかも知れない。方言は正しい日本語の姿を理解し解明するため，そしてより美しい標準語（一般に共通語）を作り出す拠りどころ，根拠とするために，不十分な文献（文語・口語のすべてを網羅していない，残された文献は主として文語が中心となっている）だけでは十全を果たすことはできない。そこに文献的記録以外に口誦的記録に頼らざるを得ない理由がある。その意味で方言は文化財といわねばならない。日本の歴史や文化を正しく知るために古墳的なものの発掘が続けられているように，方言は正に古墳と同様な文化財的価値として発掘保存されなければならない。それは今を措いては永久に保存の機を失ってしまう危険がある。

そこで文化庁は全国各県の方言を3年連続でテープに収録し，それを文字化するという大事業を企画し，それを受けて山口県教委文化課の斡旋で県下を5地区に割り，梅光女学院大学，山口大学，徳山大学がそれぞれ分担し，夏休み（53年）から作業にかかり各地区に飛んだ。5地区は①萩市見島②豊北町特牛③美祢市伊佐④徳山市大道理⑤大島郡屋代であった。

初年度はテープに9時間分を収録，その中から3時間分を選び文字化する作業である。70歳以上の男女でその地区に生活中心を置いていた者に限り，学歴は小学校卒が好ましく，職業は農業や漁業の一般的職域を選び部屋を密閉して

の苦行であった。紙をめくる音をおそれ、机にあてるペンの音などを警戒し、何より蟬の鳴き声に神経を尖らせての難行であった。

私は徳山市大道理に出かけた。新南陽市富田から北に車で25分ぐらい鹿野町に近い山間の村であった。巨視的に地理的空間からみると大道理の方言は、瀬戸内海側の山陽道という交通のはげしい位置の中央部であり、山間の地とはいえ、かなりな混融があることは否定できなかつた。近世までは海路の交通がことばの流れを交錯させ瀬戸内海方言という共通の方言圏を形成し、近代になって山陽線による人の流れは徳山市を中心に海軍燃料廠時代とコンビナート時代を通じて、激しい交流を強いていた。当然周防部の東部方言と長門部の西部方言を複雑に吸収したにちがいない。大道理はその徳山市の山間部であって、昔の馬車の時代はともかく、バスや車の時代になってその山間の方言を純粹にいつまでも守ることは不可能であろう。しかし、70から80歳の生存者のいる現在はまだその方言の温存を垣間見ることができたといつてよい。

今の青少年が、百パーセントに近く文化や教育に接して成長した頃は純粹な方言をそのまま残すことは不可能に近いとおもわれる。私はテープを聞きながら、ときに混融した方言のいくつかに触れて、そんな思いを走らせたことしきりであった。

山口県の方言は周防部と長門部に大きく分けられ、更に周防部では東の大島と岩国川上流の山間部が方言の宝庫の秘境であり、長門部では豊浦郡と北浦（日本海岸）地方とに方言地図を分つことができるが、その周防部と長門部の中間の山口・防府地方は独特のアクセントを持つ方言区域であって、地理的に長い山口県は巨視的にみれば、周防・長門・山防の三大方言区域があるとみてよいだろう。

さて、大道理は山防（山口・防府）地区に近い周防地区という関係から語彙とアクセントは微妙に雑多に影響され、県下の方言を集約しているような感を抱いたものである。この実感を強くしたのは、私自身が県下の三ヶ所に転住していたからである。私は徳山に生まれ、豊浦郡（長門部）に青年時代を過し、壮年時代を山口市に生活し、再び現在は徳山に在住した、このことは山口県の

三大方言地域をすべて廻ったことであって、大道理の方言がいかに山口県方言の混融であるかを如実に実感させてくれたのであった。

テープの内容をすべてそのまま紹介すれば一目瞭然にパノラマ的に理解して貰えるわけであるが、ページの関係もあり、傾向的なものを抽出してその特色をまとめてみることにしよう。さきにも言ったように大道理方言は混融しているので、抽出した傾向はそのまま山口県方言の傾向を代弁しているのではないかと思われ、かえって山口県方言の特色を理解するには便利な点もあるのではないかと思われるのである。以下、各項目にわたって順次述べてみる。

〔1〕 音韻上の特色

①長音化が目立って多い。

※名詞・代名詞——爺さん（ジューサー） 婆さん（バーサー），あれ（アレー）
これ（コレー） ソレー，アレー，ドレー，（ドリョー，アリヤーなど拗音と併存することも多い。ソリヤー・コリヤーなど。）名詞に助詞のつくとき約まって長音化する場合は極めて多い。私は（ワシヤー），君に（キミー），人を（ヒトー），海へ（ウミー），君のうち（キミンチ），なにか（ナーニカ），どれに（ドレー），あれは（アリヤー）など。

※形容詞・形容詞型助動詞——無い（ナー），よい（ヨー・エー・イー），細い（ホソー・コマー），寒い（サムーイ・サミー），暑い（アツーイ・アチー），赤い（アカー），黒い（クローイ），長い（ナガー・ナゴー・ナーゴ・ナガーイ），ちいさい（チーサイ・チサーイ），まい（マー），たい（ター），らしい（ラシー・ラシュー）

※形容動詞——きれいだ（キレーダ），あんなだ（アネーダ）などコソアド系はみな長音化する。

※動詞——焚いて（ターテ），出して（ダーテ），読んだ（ヨーダ），書いて（カーテ），聞いて（キーテ），泣いた（ナータ）など。また動詞に助詞がついたときにも名詞の場合と同じく長音化する。見にゆく（ミーユク） 思えば（オ

第11・12合併号

モヤー・オモーヤ), 思うと (モート), 思っ (オモーチ・モーチ), 空いて (アーテ・アエーテ), 引いて (ヒーテ・ヘーテ), 飛んだ (トーダ) など際限のない状態である。ある (アール), 見る (ミール) など一語も長音化することが多い。

※副詞——たくさん (タークサン・タクーサン), 少し (スコーシ・スーコシ・チート), よけい (多いの意。ヨーケ・ヨケー)

※接続詞——そして (ソーテ・ホーテ・ヘーテ), そしたら (ソータラ・ホータラ), それから (セーカラ) その他, 助詞は前の語と混入して消去したり長音化することが非常に多い。は・に・を・へ, などは前述のとおりである。まで (マデー), 雨が降るから (降るケー) といった具合である。

②撥音化も多い。

名詞・代名詞, 及びそれに助詞のつく場合をみると, もの (モン), なに (ナン), 君のだ (キミンダ)。(の) の母音脱落 (no) → (n・ン) が圧倒的に多く, 防長方言はこの種のはすべて (ン) となっているようだ。例えば助動詞 (ぬ・ない) (nu・nai) の母音脱落が (n・ン) となり, ときに i が残ってイが語尾に添った場合がある。行かぬ (イカンイ) するのだ (スルンダ) あるのだ (アルンダ) など。その他, それで (ソンデ), 雨が降るから (ケン) など各品詞にいろいろの形で現われている。

③拗音化も多い。

俺は (オリャー・オラー) 道を (ミチョー) 時には (トキニャー) 牛を (ウショー) などの名詞に助詞のつくとき子音・母音の脱落が原因で頻出する。並列の場合にも, 「雨もフリャー (降り) 風もフキャー (吹き) 干魃もある」。条件型にも「雨がフリャー傘を持て」また感動型に, 「雨がフリャー」などいろいろのパターンに現われる。拗音の特色的な例をみると,

●チャー (ては) の約。取っチャーいけなない・行かなくっチャー負ける。時には, 強めや念押しに終助詞として (それは駄目っチャー) また感動詞的に (チャー驚いた) と用いる。

●チュー (という) これも多い。およそ, (て) は (チャ・チュ・チョ・チェ)

など変化が多い。やっておこう（やっちょこー）、見てやろう（見チャロー）、話してみなさい（話しチェミンサイ）など。チューが更にチュート（という）となって現われるが独特のニュアンスをもって接続詞として一語となる。たとえば、

僕が行かん①チューテいう②チュート、彼も行かんチュー。③チュート彼女泣き出した。

③は（と）（すると）（そうすると）の接続詞に熟して転成したもので、（と言うと）の具体的意味はなくなっている。そのことと同じ意味合いを②のチュートも持ったもので、（いうチュート）は（言う）と）ぐらいの意味に当る。ともかくチューは防長方言に非常に多く用いられている。

- チョル（ている）これも極めて多く用いられて、私の在京時代には（チョルのおじさん）と言われたほど頻発したものである。

私ニャー（には）ヨー（よく）見えんのジャ（だ）が、見チョル（ている）チュート（と）猿が登っちょッテ（ていて）遊んジョル（でいる）んジャー（のだ）ヤ。

チョルは熟して転成助動詞のように活用して用いられる。見チョらん・見チョッた・見チョル・見チョル人・見チョレバ・見チョレ、など防長特有の助動詞である。前にくる語が撥音のときはジョルとなってチョルと同じ現象をあらわしている。飛んジョル・死んジョッた、など。

- チャゲル（てあげる）これも多用される合成助動詞化した防長の愛用語である。チョルと同じく前に撥音語・イ音便がつくとジャゲル（死んジャゲル、漕いジャゲル）となり、活用する。死んジャゲよう・死んジャゲた・死んジャゲル時・死んジャゲレば・死んジャゲレなど。

- ニャー（には）これも主格や条件型や、また終助詞的にも多用されている。

雨が降らんニャー（ないならば）出かけよ。私ニャーできないっチャー。できるチュー君が行かんニャー、早う出かけんニャー。

仮定形のニャーは古語の假定法（むには）の転用だが、防長語の（ん）は前出のごとく否定形の（ぬ・ない）の転じたものだから（んには）が（ンニ

ャー)と否定的假定法となっている。結語のニャーは念を押す時や強めに用いて終助詞化したものでチャ(又はチャー)と同じである。

- リャー。これも語の結合の時に多く現われる。主格や条件型や終助詞的用法や感動的意味合いの時に用いられるのは上述の用語例と同じである。

おりャー(俺は)そりャー(それは)見チョらんが、よけリャー(よければ)みせてくれーヤ。こリャー(これは、感動詞とも考えられる)死んジョリャーヤ。(死んでいるよ。結語のヤは後述するがノ・ナ・デなどと共に防長に多い終助詞)

以上は一例だが語の結合による拗音化は非常に多い。若干をみると、見チョこう(見ておこう)ミチョー(道を)ムギョー(麦を)こいつァー(こいつは)アミャー(雨は)時ニャー(時には)など数限りなく現われてくる。終りに防長方言だけではないが断定のジャ(だ)が非常に多い。これも頻発するため、上記の用語例のごとく巾広く、接続詞にもまた念押し強意の終助詞法にも転用されている。

雨のようジャが出かけるんジャ。ジャガノー、女子供はジャネ、留守をするんジャゾヨ。

- ④促音化も多い。

各品詞にわたっての現象で、名詞の、わたしら(ワッシラー)ことは(コッター)げどう(ゲッドー)づくてん(ズッテン)動詞の光る(ヒッカル)たける(タッケル・叫ぶ意)つつく(ツツック)など。防長特色語に(買った・借りた)を(カッタと発音を同じくし紛れやすいという現象は有名である。以上のごとく促音便はイ音便・ウ音便(長音化)撥音便と共に防長語に非常に多い。特に防長に多い前述の、チャー・チュー・チョルなど特有の助辞化した語につくときは促音化することが多い。例えば、

見るッチャー・行くッチャー・するッチャー。帰るッチュー・書くッチュー・読むッチュー。知ッチョル・行ッチョル。

形容詞もウ音便と共に促音便が多い、その点は東京方言と同じ傾向でもある。美しくて(美しくッて)、よくッて、ないッて、などで、また、しつこ

い(シッコイ), ちいさい(チッサイ・チッチャイ), 副詞の, ちいと(チッター・チット), とても(トッテモ), その他, 助詞でも(けれどーケッド)(ばかりーバッカリ)(だけーダッケ)代名詞の(こいつーコイツ)(あいつーアイツ)といった具合である。

⑤母音の変化も多い。

そいつ(ソイト), こいつ(コイト), あいつ(アイト), 見ていて(見トイテ), 毎年(マエトシ)

⑥アクセントの特色。

はじめの部分にアクセントをつける。特にゴザイマシタ, アリマス, ナリマシタ, オイデマセなど山防中央地区(山口・防府)に多い。

〔2〕 文法上の特色

①サ変の下一段活用

するーセル。しないーセナイ。一般にサ変は下一段に用いる。信ずるー信ヅル, 感ずるー感ヅル, と用いることが多い。

②否定表現(ない・ぬ)をンと用いて(知らん・足らん)その類推が(取れらん・見らん・読めらん)と表現することがある。

③可能と不可能表現に古語(えー否定語)の形式の残存が多く(エー行かん・ヨー行かん)といった表現をとる。

④主語(は)目的語(を)対象語(に・へ)所有格(の)などの省略が多く, その際に長音化, 拗音化など前述の音韻上の変化をおこすことが多い。

⑤チョル, ヤガルなどの動詞の接尾語化的使用が多い。見チョル, 死んジョル(チョルの連濁), 見ヤガル, 死にヤガッた。など。

⑥終助詞用法の独特の語が多い。ノンターは特徴的で間投語として次項にあげられるが, 一般的な終助詞は次のごとく多い。

ノ(又はノー)

雨が降ってノー, 困ったイノ。

第11・12合併号

ナ (又はナー)

あのナー, 俺がナ, 行ったんだよナ。

イ (イノ・イナ・イネ・イヨと併用も)

そうですイノ, 見たイネ, 行きますイヨ。

デ (デイ・デノ・デナ・デヨ・デネと併用)

見るデノ, 明日は雨デナ, 雪かも知れんデイ, 俺も行くデヨ, 俺は知らんデ (デネ)。

ガ (ガネ・ガノ・ガナ・ガヤ・ガヨなど併用も)

わしも見ましたガナ, 犬がいましたガノ, おらも見ましたガネ (見ましたヨの念押しで, 接続助詞のガではない) 知っておろうガヨ, それほどでもないガヤ。

ド (ドーとも。ドエ・ドナ・ドモエなど併用)

俺は知らんドー, わからんドモエ (ドナ) (ドエ)。

ニ (ニイ・ニイノ・ニイネ・ニイナなど併用)

どうにもなりませんニ (イ) (ニイノ・ニイナ・ニイネ)

ヤ (ヤー)

俺^ア知るケーヤ (知るものか)。お前も行くヤ (行くかネ?)。行こうヤー (行こうではないか)。見られちよるイヤ (見られているよ)。

ケ (ケー・ケーノ・ケーナ・ケーネとも併用)

雨が降るケー。これは (降るから) の (理由) の意味だけでなく, 俺は知っチョルケー (知っておるよ) という念押しや強めにも用いる。

ン (〜ンジャ・ンネ・ンヨ・ンノなど併用)

私, 見ちよったン, 私泣いておったンヨ。あんたは知っちよったンネ (ンノ)。

ソ (ソヨ) <よ>に当る。

うちは行かんソ, 何も見んソヨ。

ホ (ホヨ)

私のホヨ (ものよ)。どこへ行くホ (のか)。

山口県方言考

テ (テー) 念を押すときに用いる。テノ・テナ・テネ・テヤの併用もある。

少しも見てはおらんテ。見たテーヤ。と長音化も多い。

ゲナ (ゲナイ・ゲナデ・ゲナデヨ) など。伝聞推定 (後述)。

あいつも知らんゲナイ (ゲナデ・ゲナイノ・ゲナイヤ・ゲナデヨ)

チャー (チャーヤ・チャーノ)

そんなこと知っちよるチャー。(更に念を押して、チャーヤ)

トモエ (トモエノ・トモエサン)

驚いたトモエ。(トモエノー, トモエサンは強意余情) — (後述)。

⑦間投語, 意味もなく語間に入れて呼びかけたり念押しや強めや相手の注意を引いたり, 思考の合い間の間をとるために色々のニュアンスの語が多い。

コリー (呼びかけ語の間投語) ノー・ノンタ・ネエター・ツイ・ハー・マアー・ナニー・ナンデス・ナンデアリマス・ナンドス・ナンドエスイノ
ー・ナンデゴザイマスイノー・ナンジャゲナー・ホンニ・ホントニマア・
(アノ) ナー・ソレデナンデス……などを組み合わせたりして使用する。

一例をあげてみると,

○コリアノナお前, ハー日が暮れたケーノー, ハー帰ろうデーノンター。
ハー暗いデノー, なにも出来んチャー。ハー家ジャー心配しチョルケーノ,
ノー帰らんニャーいけんがナー。ハー明日の勉強せんチュートやられるイ
ヤー, 家ジャーナー, ハー大騒ぎしチョルかも知れんデヨ。

防長語に (ハー) が多い。はや (早や) もはや (最早) の転であるが微妙なニュアンスを持たせて多用する。既に (もう) の意味とか, すぐに (急いで) の意味とか, すっかり, 全くの意味など微妙である。ノンター・ネエターは (ねえ, あなた) の転だが, 語調や語勢のため, また感動詞的に語間に投入して頻発する。(おい) と呼びかけるコリーも珍しい。

⑧敬称と卑称のことば。

語彙上には各品詞にわたり尊卑の別があり, 文法上にも音韻上にも区別されるが, 敬意表現には共通語と大差はなく東京方言と近い関係にある。それは周圏論 (古く京都を中心に波紋状に広がる現象) の上からも, また明治維新にお

第11・12合併号

ける長州人の進出などからも想像される。敬意表出は表向きのことばで多く清音で表現されているが、卑称語や罵称語また同僚友人それに親しい間柄のことばは前記の⑤⑥⑦あたりの方言が使用される。長音・拗音化現象は卑称の場合に多く出てくる。例えば、キタナイワ、ネ。→キシャナーワーヤー、とか、キッタネーノー、といった具合である。次に防長特有の尊卑用語をみると、○～でございます。

デゴザンス・デゴザンスイ・デゴザンスデ・デゴザイ・デゴザイノ・デゴワンス・デゴッス・デゴッスイ・デゴッスデ・デガス・デゴワス。これらに前記⑥の終助詞のノ・イ・ネ・ナ・ヨなどがつく。デゴワスイノー、など。

○～(し)て下さい。

サンセイ・サンセー・サンセーナ・サーレ。また、シーサイ・シーサン、シーサレ・シサンセイ・シーサレイ・シーサンネなど

○卑称語の多用語に、コイツ・アイツ・ソイツ・ドイツ・ヤツ（これらにラをつけることが多い）ヤロー・ゲドー・ヤトラ（やつら）・ガキ・ゲス・ホイト（これらにメをつけることが多い）。「君」をキサマ・オドレ・オノレ・テメエ・ワレ・コリャンセ・オメー（ラをつける）。「私」をオラー・ウラ・オイラ・オリャー・オドマ・オドモ・オダン・ワレ・ワシ・ウチ（西部）ワテ・ワッチ・ワチキ・ワッキ・オマ・オヤ・オルマ・オンマ・オンモ・オマラー・オラマー（東部）と表現する。

呼掛けに、コリー（おい君）があるけれど、コリャーとかコラーに近い譴責の意味はない。（悪童に対しては譴責にもなる）

コソアド系（こんな・そんな・あんな・どんな）の卑称語は——ソネーナ・ソネットー・ソネゲテーナ・ソギャーナ・ソント・ソゲーナ・ソガーナ・コガイナ。これらは東部はゴガーナ・コゲーナと言い、西部はコネーナが多用されてコソアド語に共通している。

○助詞の卑語や親称語は⑥にみたとおりであるが、例えばヤなどをみても微妙なニュアンスがある。ヤが非常に多用されている。

●何ですか（ソレハ何ヤ？）、誰がですか（行クナー誰ガヤ？）＜行くのは誰

山口県方言考

って?>の疑問のほか、何ヤ、何ガヤ、は(何とまあノ)の感動語にも言うし、また(何かねノ)と反撥の応答にも用いる。

- ゲナ・ゲナデ・ゲナデヨ・ゲナデー・ゲナイ・ゲナーヤ(～ということだ、～であるそうだ)の意味の単称語で仲々多用される。「いつもボルノを見チャルゲナーヤ」(ゲナデヨ、ゲナデーなど)
- トモエ・トモイ・トモイサン・トモエナイノ。大体に(ヨ)を強めたものだが、思いがけない時の驚きの場合に用いる。「あの時は驚いたトモイサン、大入道が出たトモエノ、こわいっタラなかったデ」このタラも防長に多く(といったなら)の意である。
- ドマー。これもニュアンスの多いことばで、同類の一つを示す近世語(享保元年「世間娘容気」など)が多用化したものである。
 - 「ことしドマー大干魃だった」(～など、と一例を抽出する意)
 - 「おれドマー苦労したイ」(複数のドモ・タチの意)
 - 「一年ドマー住んだ」(クライの意、だいたいの数量を示す意)
 - 「夏ドマー海にでも出かけよう」(コロの意。休みドマー、などコロニデモの意)
- ハイ(ハー) イイエ(イイヤ・インニャ・ウンニャ)など応答は東京のエエに当たるがハー・イイヤが多い。敬意の程度は、ハイ>ハー>ウン、イイエ>イイヤ>インニャ>ウンニャ、の順である。

〔3〕 防長特色語について

チューニ、ゴッポー、ドヒョーシモナーの3語はトレードマークみたいにいわれている。共通して甚だしい感を与える意味合いに用いて、非常な程度・大変な数や量・全面的な肯否・断呼とした意志や感情の表現に頻出する。一般に甚だしい表現は強調の意味も加味されているの語が防長にある。ゴッポーと類似のゴツ、ゴギニ(ゴギナ)、オッポナ、オッパイ(見島など)、イッパイ、ヨケー、エツト、エロー、ジョーニ、エラク(エライ)、エライコッ

第11・12合併号

チャー（エライコトニ）、ドーナコーノ（ドーナコーナー）、ドーナコーナー（ドーナコターナー）、バクダイ、ヤレニ、ヤーニ、ホガニ、ヤリノヤンダー、など多い。接頭語はブチ・サデ・ウチがあり、ブチ急ぐ、サデ捨てる、ウチ忘れた。とすべてことの甚だしさを表現したものである。

●チューニ。これは「中」ではないかと思われる。近世語の中溜（ちゅうだめ）は、大づかみ、いいかげん、あてずっぽうの意であり、中腹（ちゅうばら）は、甚だ怒ること一勇み足の意、声を一気にはり上げるような時に用い、中開（ちゅうかい）は、全く、すっかりの意味で下に否定語がつくと全面否定となり、全くわからないといった意味になる。この近世語は都濃郡徳山に残っている。およそ、「中に」（ちゅうに）は本当に、すっかり、全くといった意味に用いられているところから、この近世上方語が本土の西の端に留ったものかも知れない。一茶の「目出度さも中ぐらいなりおらが春」も中程度でなく、つまらぬ、だめな、面白くもない、いやな不快な意味合いである。チューニ風が吹く、チューニ遊びまくる男、など「中」を類推使用したものではないかと思う。ほかに「宙に」も考えられそうでもあるけれど。

●ゴッポー。いつか老父が遣唐使の答札で来朝した唐の使臣の呉袍（呉の国の衣服）が甚だ豪華であったことから呉袍がゴッポーと訛したもののジャーナカと話したことがあるが、どうもあやしい。むしろ五方（四方と中央で全ての意）の転かと思ったこともある。風がゴッポー吹く、は四方五方に吹きまくる感があるがどうだろう。また近世語に「業報人」（悪業の報いを受ける人）ゴッポーニンといって人を罵倒するとき甚だしい感をこめて「このゴッポーニンメ」（文化6年・浮世風呂など）と力をこめていう、これらもゴッポーの語源ではないかと思った。

●ドヒョーシ・ドヒョーシモナイ

これも近世語（文化7年・江之島土産）で防長に方言化した語である。度拍子と当字を書き、（度拍子）も（度拍子も無い）も同じ。無いの否定語は悪い意味合いの時に用いる。モッタイナもモッタイナイ、も同じである。これも老父がさきの唐使臣の行列が豪勢で土ほこりを立てるばかりだったので、土拍子

が甚だしい形容になったンジャローカイと話した。面白いがこれも、ゴッポーあやしい。(ど)はドエライ, ドマンナカなど強意の接頭語でドヒョーシは拍子はずれぐらいの意味のようだ。

とほーもない(途方), とほーず(途方+方図)もない, とほーとてつ(途方途轍)もない, とっぴょーし(突拍子)もない, などの近世語が文献にあるところから, 「どひょーしもない」が派生したものかも知れない。

〔4〕 防長文言と古語

古語がある時代に消滅し, それが偶然にある地方に化石のごとく温存され, その地方独自の方言として残ることがある。それがその地方にのみ通用するときそれを方言とし, 方言が国語の正しい歴史的理解に重大な役割を果たすことがある。防長語は古語が, それも特に近世語がかなり正確に多数に残されている。上代から近世までの若干の古語をみると,

○ミテル

(満つ)の転。いっばいの意だが, 時間でもいっばいになることは無くなることで, 「時間がミテタ」という。(無い)の逆の意の(満つ)を無いと表現するようになった。これは, 梨(ナシ)を縁起が悪いとして(アリ)と表現する原理も作用したものであろう。無くなることをミテタという方言は珍しい。

○クエル

(崩ゆ)くずれる, 朽ちる意。(満つ)と共に奈良平安のことば。「土手がクエタ」

○アエル

(落ゆ・アユ)落ちる意から果実が熟れて落ちること。これも上代の語。鮎も滝つ瀬からのぼるとき落ちるので「アユ」といったものである。

○アラガウ

(諍ふ・アラガフ)嘲笑したり争うこと。「子供をアラガウな」これも中古語。

○ホダエル

近松門左衛門の女殺油地獄に「こぶし一つ当てずほたえさせ……」は甘えさせふざけるままにさせておくの意。安永4年物類称呼に「ざれたはぶる事を上方にてほたえると云ひ関東にておどけると云」とある。防長でもホダエヤガルをふざけることに言う。

○ヨケイ（余計）ヨケー

近世語では余慶を当てて「余慶はない巾着の底」（享保20年・渡世身持談義）とか「それより余慶かかる」（元禄16年・立身大福帳）前者はたくさんの意、後者は一層尚更の意。防長では「時間はモー、ヨケーは無い」（余裕・余分の意）「お金はヨケー無い」（多いこと沢山の意）「だから君はヨケー努力が必要だ」（なお一層の意）あるいは「ヨケイモノ」（役に立たぬ余された者）として使われていて、まさに近世語である。

○イヌル（ナ変「逝ぬ・往ぬ・去ぬ」）

帰る、行く、去る、の意味。「ハー、イナンカー、おらあいヌルデヨ」

○ワヤク・ワヤ

「わやわやって国佐屋へ上る」（天明4年・角鶏卵）など、わやわやの擬態語の動詞化・名詞化で文化文政以後の流行語で諸文献に多く出てくる。「わやちゃ」（天保3年・当世詞粹山人）「わやくな事をめさるる」（元禄3年・十二段）など無法・非道・無茶の意。「足もしどろの女連れわやくな風の……」（享保9年・諸葛孔明鼎軍談）は、悪ふざけの意。「幼な心のわやくさに、いやちゃとやんちゃ言ふ」（元禄15年・沖津白波）は我儘の意。「子供同志のわやく同士」（延享2年・夏祭浪花鑑）は腕白の意。文政4年の浪花方言に「わや。江戸で云やにつこいな」とあり、ヤニコイと同義に用いたらしい。防長で「ウチ（わが家）はモーワヤじゃ」と夫婦喧嘩の時にでもいうのはダメな意味で「おお好かん由良さんの日柄みんなわや」（天保・忠臣蔵穴さがし柳樽）と同じ。近世は防長に生きている。防長にワヤクソ、ワヤクチャが派生して生きている。語源に枉惑・誑惑（ワウワク）の転訛説もあるが、わやわやに（わいわい騒ぐ意）という語もあることだし擬態語の動詞化とみたい。

○ユーサリ

夕去る（去るは来るの意）の連用形名詞法で、夜去り（ヨサリ）と同類で、夕方・夜の意味だが、ヨースリが防長に残って王朝時代を偲ばしてうれしい。他県にも残っているところもあるが、大切に使用したいことばである。

○イラウ

触れる意だが防長ではいじりまわす感じで少し悪意的なニュアンスがあるが軍記物などでは手に触れるぐらいの意味のようである。

○コゲル

阿武郡あたりに嫉妬の意味として現存するのは何ともうれしい。やけるが嫉妬の意だが焼けてこげるぐらいに嫉妬しなくてはおもしろくない。これも古語だがもっと使ってこげて燃えるほど嫉妬してみたい。

○コケル

倒れることを防長ではコロボ以上に多く用いている。近世上方の古典に多いがおそらく防長に最も頻発して用いる語ではないかと思う。ユーモアもあって親しい。こく（倒く）の連用形のコケコムは今も生きている。

○ココシル

平安時代に「子々し」（子供っぽい可愛いさ美しさ）という形容詞に（ル）をつけて動詞化したもので、デモ（ストレーション）ルの型である。子供を愛撫することをココシルといって防長に残された珍しい方言である。

○サイバシル

枕草子にも出るなつかしいことば、先き走る。才走るの説があるが人前に出しゃばることである。その意味がそのまま残っているのは貴重な方言である。

○オドロク

平安時代頃より目を覚ます意味で古典に頻出する語だが、防長で今も目を覚ます意味に用いられていることはたのしいことである。オドロクと同じタマガタも目を覚ます意味に用いられているのもたのしい方言といえる。

○ユリル

許すことを古語では「世に許りたること」（世間で許され認められたこと）

第11・12合併号

など「ユリ」と古典に出てくる。そのユリに前述の動詞化のルを付けてユリルと表現し、許すの意味に使っているのも、たのしい方言である。

○タケル

大きな声でタケッテ見い、と日頃よく使う語。古事記の出雲タケルノミコトは勇猛の方で猛の字が当てられ、猛々しい人の声をタケル（哮る）と言うようになり呼びの声に似た大声をタケルとって今に防長に残されたわけで、神代の声を聞く思いである。

○セガウ

古語の「せがむ」の子音脱落がセガウとなり方言化したもの。兄弟などが喧嘩したりすると「何をセゴーチョルカ」と叱られるわけである。責めいじめるほどの意味である。十訓抄にも「せがみさいなむこといと心苦し」とあって中世の語が防長に生きているのである。

以上は、思いつくままに防長方言の古語の若干を抄出したものであるが、防長に古語がかなり温存されていることを知るのである。防長は本土の西の端で、その先きは海であるため押し流され広がった波紋はここに溜められたものであろう。

防長は九州への交通の要路にも当り、交通の開拓は遂に九州方言の影響を防長西部に与え、海路の要地のため瀬戸内方言圏と四国方言、広島方言を内海沿岸の各地に独特の方言を移植し、特に大島・祝島・蓋井にそれを温存させ、更に日本海沿岸は石見方面の方言を流し入れたもので、内海の上述の島と同様に見島をはじめ萩周辺の島には独自の方言を育て残したものである。これらのことを考えて防長方言の複雑さを今後とも検討を加えて解明を続けねばならないと思われる。